

令和 5 年 6 月 5 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2022

課題番号：20K00381

研究課題名（和文）マーク・トウェイン晩年の批評精神 まなざしは 笑いの武器 のその先へ

研究課題名（英文）Mark Twain's Criticism in His Last Years: Using the Weapon of Laughter and Beyond

研究代表者

井川 真砂（IGAWA, Masago）

東北大学・国際文化研究科・名誉教授

研究者番号：30104730

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究はマーク・トウェイン晩年期研究の一環であり、トウェインがユーモアのレトリックを「笑いの武器」として活用後も、いかにそのレトリックを使い続けるかを探ろうとする。テキストには無削除新版『マーク・トウェイン自伝』全3巻、没後100年刊を選び、「ホイットィア70歳誕生祝賀スピーチ事件」を見直す70歳の著者を論じた。「単なるユーモア作家にすぎないなら、生き延びることはできない」と述べるトウェインの作家人生を振り返る批評精神、およびユーモアのレトリックの健在ぶりを読み取った。アメリカのユーモアばかりか、ラブレヤやバフチン他の著作から中世・ルネサンスの民衆文化、道化の歴史、諷刺等についても調べた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

マーク・トウェイン研究史において晩年期の研究が長らく看過されてきた結果、複雑な晩年像はなお十分な理解がなされているとは言い難い。ましてや、そのユーモアにおいてはなおさらである。それでも21世紀初頭には、晩年期の研究が以前よりも出版されるようになり、中でもトウェイン自身の無削除新版『マーク・トウェイン自伝』全3巻（2010-2015）のカリフォルニア大学出版局刊行は特筆に値する。これまでその50%が未公開であった本『自伝』によって、アメリカの国民作家トウェインの晩年期批評精神、およびそのユーモアの健在ぶりを読み取り提示できたことは、学術的な意義ばかりか社会的意義も大きいと思われる。

研究成果の概要（英文）：This study, whose modified English title is “Mark Twain's Critical Perception in His Last Years: Looking Beyond the Weapon of Laughter,” is part of a study of Mark Twain's later years and attempts to explore how Twain continued to use humor even after he had used the rhetoric of humor as a weapon of laughter. For the text, I chose the uncut new edition of “Autobiography of Mark Twain” 3 vols. published 100 years after his death, and approached Twain at the age of 70, who was revisiting ‘Whittier's 70th Birthday Celebration Speech Incident.’ In the text I found the author's critical perception and humorous rhetoric alive and well, as he reflected on his life as a writer, saying, “Humorists of the ‘mere’ sort cannot survive.”

It was necessary for me to look not only at American humor, but also at the popular culture of the Middle Ages and the Renaissance, the history of clowning, and satire in the works of Rabelais, Bakhtin, and others.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：19-20世紀転換期アメリカ マーク・トウェイン 無削除新版『マーク・トウェイン自伝』全3巻 ホイットィア70歳誕生祝賀スピーチ事件 文化ヒエラルキー ユーモア カーニバル ミハイル・バフチン

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

(1) マーク・トウェイン研究史において、晩年期の研究は長い間相対的に看過されてきた。その結果、複雑なトウェイン晩年像はなお十分な理解がなされているとは言い難く、ましてや晩年期のユーモアにおいてはなおさらである、といった状態だったと言えよう。

(2) それでも近年、トウェイン晩年期研究に関心が向けられ、20世紀末頃から以前よりもその成果が出版されるようになった。なかでも21世紀初頭には、19-20世紀転換期のトウェインを特集した *Arizona Quarterly: Journal of American Literature, Culture, and Theory* (Spring 2005) 誌が刊行され、その中の諸論文は新たな先行研究として注目しておきたい。また、国際シンポジウムの成果をまとめた Joseph Csicsila and Chad Roman, editors, *Centenary Reflections on Mark Twain's No. 44, The Mysterious Stranger* (U of Missouri P, 2009) や、トウェイン最晩年の3年半に絞った伝記 Michael Sheldon, *Mark Twain, Man in White: The Grand Adventure of His Final Years* (Random House, 2010)、さらにはトウェイン没後100年に公刊された無削除新版自伝 *Autobiography of Mark Twain, The Mark Twain Papers*, 3 volumes (U of California P, 2010-2013) は、とりわけ貴重である。そして、本研究がトウェインのユーモアを考察するからには、Bruce Michelson, *Mark Twain on the Loose: A Comic Writer and the American Self* (U of Massachusetts P, 1995) や Peter Messent, *The Short Works of Mark Twain: A Critical Study* (U of Pennsylvania P, 2001) における “The Man That Corrupted Hdleyburg” 論他を参照できる状況にあった。

(3) そうではあれ、<晩年期トウェインの批評精神、およびそのユーモアの健在ぶり> については、必ずしも解明されてはいなかった。そうした中、トウェインの上記無削除新版『マーク・トウェイン自伝』全3巻(2010-2015)の刊行事業の完成は、やはり何よりも特筆すべき本研究開始当初の背景であった。それ以前には、その50%が未公刊だった本『自伝』は50万語から成る大部の自伝であり、いわば宝のテキストの刊行事業だったと言えよう。言うまでもなく、カリフォルニア大学バークレー校マーク・トウェイン・ペーパーズ&プロジェクトにおける、有能な専門家集団の40年以上にわたる編集技量の蓄積抜きには成しえない大事業であるのだが、このテキスト中に本研究が探し求める宝の素材が見つかるやもしれぬという私の期待は大きく膨らむ状況にあった、と研究開始当初の背景を捉えることができる。

### 2. 研究の目的

(1) マーク・トウェイン晩年期研究の一環として、トウェインがユーモアのレトリックを<笑いの武器>として活用後も、そのレトリックをいかに使い続けるかを探る。

(2) トウェイン晩年の批評精神の考察を通して、なおも生きつづけるユーモアのレトリックに注視しつつ、その晩年像の見直しに積極的に寄与する。

### 3. 研究の方法

(1) 著者の没後100年にしてようやく出版された無削除新版『マーク・トウェイン自伝』全3巻(2010-2015年)を本研究のテキストに選ぶことによって、最晩年のトウェイン70歳代の批評精神に光を当て、精緻な読みを通してその晩年期研究の一環とする。第1巻(736頁)、第2巻(733頁)、第3巻(747頁)計2,216頁の大部の『自伝』を読了した。

(2) ユーモアのレトリックを<笑いの武器>として活用後も、著者がいかにユーモアのレトリックを使い続けるかを探ろうとした。「ホイットニア70歳誕生祝賀スピーチ事件」を見直す70歳のトウェインに焦点を当てることによって、おのれの作家人生をいかに振り返るか、そのとき彼はユーモアのレトリックをいかに生かすかを考察した。

(3) アメリカのユーモアばかりか、ラブレヤバフチン、イーニード・ウェルズフォード、ウィリアム・ウィルフォード、サンドラ・ピリングトン他の著作から中世・ルネサンスの民衆文化、道化の歴史、諷刺についても調べ、広い視野からトウェインのユーモアの位置を考察した。

(4) 亀井俊介氏と読むマーク・トウェイン『自伝』読書会に出席し、報告や討論を担いながらその読解ならびに分析を深めた。テキストはトウェイン晩年期の重要な著作 *Autobiography of Mark Twain, The Mark Twain Papers, 3 volumes* (2010-2015) である。読書会 (2011年3月にスタート) は2023年5月15日現在第46回例会を終え、私自身は全例会に出席した。次回例会 (第47回、2023年8月29日) で読了予定である。

#### 4. 研究成果

(1) 本研究課題「マーク・トウェイン晩年の批評精神 まなざしは<笑いの武器>のその先へ」は<晩年期トウェインの批評精神、およびそのユーモアの健在ぶり>を考察するものである。もとより著者の批評精神とそこで発揮されるユーモアのレトリックとは不可分の関係にある。

「マーク・トウェインと世紀転換期 (1890 - 1910) 反帝国主義の修辞」(2010 - 2012年度科研費助成)、「晩年のマーク・トウェイン 新版『自伝』(2010)に見る著者の歴史意識」(2013 - 2015年度科研費助成) 、「そして「マーク・トウェイン晩年のユーモア <笑いの武器>による批評精神」(2017 - 2019年度科研費助成) により得た成果は、つぎのとおりである。

トウェインが青年期に習得したユーモアは、彼の反帝国主義言説の修辞の中でも生き続けるか。生き続ける。そのレトリックは、地理空間的にも社会的にも広がりを見せ、変容しながら生き続ける。(たとえば *Following the Equator* (1897) で、P.T.バーナムによる[シェイクスピアの生家を購入してアメリカに移築する企てという]「ひと担ぎ」を、きわどいアナロジーとして本旅行記中に滑り込ませ、南アフリカでのセシル・ローズの策謀を暴き、嗤う。)

晩年の<笑いの武器>が“sense of satire”の傾向になるのは避けられないか。避けられまい。ならば本研究は、James M. Cox, *Mark Twain: The Fate of Humor* (Princeton UP, 1966)における見解(“sense of humor”と“sense of satire”とを截然と区別する[286])とは異なって来よう。本研究では脱歴史主義の立場を採らない。

トウェインはユーモアをどのように定義するか。まず“*How to Tell a Story*” (1897)では、それを定義するというより、アメリカのユーモアにおける「語り方」の奥義をもっぱら取り上げ、絶妙な「間」の取り方こそが肝心であると論じる。そして、その話芸を「繊細な美しい技芸(“art”）」と呼ぶのである。ついで、トウェインによる唯一のユーモアの定義と言いつるものとして、“*The Chronicle of Young Satan*” [1897-1900]の中で少年サタンが力説するユーモア論議がある。それを読む限り<“sense of humor” ユーモアのセンス>とは<“humor perception” ユーモアを認識する力> (166)を意味する。それは、道理にあわぬ<“funniness” 滑稽さ>を見抜く力のことであり、習得可能な力である。少年サタンはその<ユーモアのセンス>を<笑いの武器>として使う。その結果、晩年のこのユーモアは、きわめて転覆的な性格を帯びることにもなる。このユーモアが<笑いの武器>として作品中で表象されるさまは“*The Man That Corrupted Hadleyburg*” (1899)で見ることができよう。つぎにトウェインは、ユーモアの内実に言及し、無削除新版『自伝』第2巻で上記における少年サタンのユーモア論議を補い深める。「単なるユーモア作家にすぎないなら、生き延びることはできない。“*Humorists of the ‘mere’ sort cannot survive*” (*AutoMT2*, 153) 」と云うのである。なぜなら「ユーモアとは、ただの香りづけであり、飾りつけにすぎない」(*Ibid.*)からである。「私はいつも説教をしてきた。だから、30年間持ちこたえたのだ。もしユーモアがおのずと生まれて来るなら、その説教の中にそのまま入れておいた。しかし私はユーモアのために説教を書いていたわけではない」(*Ibid.*)と続ける。ユーモアの中身に立ち入ったこうした表明は、トウェインには稀有なことであり、示唆に富む叙述である。これまで彼は説教をしてきたと云うのである。

トウェインはユーモア文学と小説(高尚な文学・純文学の謂い)とを対比する。「小説はもっぱら芸術作品であるべきなので、そこで説教してはならず、教訓を垂れてもならぬと説く人たちがいる。なるほど小説に関してはそうかもしれない、だがユーモアに関してはそうではない。もちろんユーモアにおいてももうわべだけの教訓を垂れてはならず、うわべだけの説教をしてもならぬのだが、ユーモアがずっと長く生き続けるためには、その両方をきちんとやらねばならぬのである」(*Ibid.*)と云う。ここにはおのれの文学に対する矜持が示されるのはもちろんだが、純文学に対するトウェインの対抗意識、芸術のための芸術や高尚な文学への揶揄、屈折の入り混じった複雑な作家意識などが含意されているだろう。なにしろ「私はこの世を去った者であり、墓の中から語っているのだから、こんな自惚れたことを腹藏なく言えるのである。いくら私だって生きていたらこうまで厚かましくは言えないだろう」(*Ibid.*)と。トウェインは、没後100年後の読者に向かって、そう語るのである。

(2) 今期の課題(2020 - 2022年度科研費助成)では、上記の成果を受けてアメリカのユーモアばかりか、ラプレーやバフチン他の著作から中世・ルネサンスの民衆文化、道化の歴史、諷刺等について学ぶ必要があることを自覚するに至り、広い視野からトウェイン研究を進めることによって有益な知見を得た。

「もしも私が15世紀に生きていたら、私はラプレーになっていただろう。ラプレーのことなら頭のとっぺんから足の先まで知っている」(*New York Evening Journal*, 24 October 1903)と、トウェインは語る。そこで私は、フランソワ・ラプレー作『ガルガンチュアとパンタグリユエル』全5巻(宮下史郎訳、2005-2009年)を読み、トウェインがラプレーに魅かれる理由を手

探りした。なるほど、トウェインとラブレーとの共振要素は少なくない、これは本研究にラブレーの援用が可能な徴候でもある。もっともトウェインはラブレーほど骨太ではないかもしれない。しかし二人の共振要素を挙げれば、つぎのような諸点がすぐにも浮かんでくる。すなわち、作品世界の豊饒さ、予想外の脱線やプロット展開、冒険旅行、時事的社会的批評、既成のキリスト教会への懐疑的・批判的姿勢、支配文化への抵抗、知への欲求、理性の尊重、生命への賛歌、口語や民衆文化への共感等々である。

ついで、ミハイル・バフチン著『フランソワ・ラブレーの作品と中世・ルネッサンスの民衆文化』(1973年、川端香男里訳、1997年)に大いに啓発された。バフチンの議論には、ラブレーに対する私の当初の「つまずきの石」(129)を払拭する力強さがあり、「世界の豊かな物質的原理」(239)、物質的存在としての人間の「グロテスクな肉体のイメージ」(267)、民衆の「グロテスク・リアリズム」(418)、「民衆の笑い文化」(239)等々に目を啓かせた。

バフチンはこう論じる。中世の人びとの生活に大きな場所を占めていたカーニバル型の祝祭は、「民衆的・広場的笑いの側面」(12)を持っており、ヨーロッパ中世のすべての国に広まっていた。ルネサンス思想が「中世の公的文化」と戦う際にただひとつ支柱を与えることができたのは、「何千年にもわたって形成されてきた民衆の笑いの文化」(239)だけであった。「中世の公的文化」とは、別言すれば、公的な第一世界の文化、封建的な文化、カトリック教会という単一組織によって支持された文化、畏怖と強制に基づいた一面的な生真面目なゴシック文化のことである。カーニバルは「公的な世界観の支配から意識を解放し、世界の新しい見方を可能にした。新しい見方は、畏怖、敬虔の念もなく、絶対的に批判的であると同時に、いささかのニヒリズムも持たず、肯定的であった。なぜなら世界の豊かな物質的原理、生成と交替、新しきものの不敗性、新しきものの相変わらぬ勝利、民衆の不死を明らかにして見せたからである。これはゴシックの世紀の攻撃に対する強力な支えとなったし、新しい世界観の基礎を打ち立てる際の支柱となった。これは先刻語ったあの意識のカーニバル化である。それはゴシック的生真面目さからの完全な解放であり、それによって、新しい、自由で酔いしれていない真剣さへの道を準備しえたのである」(239)と。

「バフチンの<カーニバル化>の概念は、“The Man That Corrupted Hadleyburg”の読解に適用できる有益な方法である」(171-72)とピーター・メセントは論じる(Messent, *The Short Works of Mark Twain*)。メセントはカーニバル化する民衆(公会堂の場面)を描くトウェインを積極的に評価する。ただし、作品結末の読解では、民主主義的な価値観等に対する著者の姿勢に「積極的な響きあまりない」(182)とするため、トウェインが「民主主義的な価値観や民衆のエネルギーに対する姿勢に相反する感情を持つ」(182)という結論を導き出す。そして、なぜか「トウェインの執筆人生のこの時期までに、それらに対する姿勢はかなり暗いものになっていた」(182)とする一文を論文の最後に書き加え、晩年の暗さを当然視するような結語とする。

一方、メセントにバフチンを読む刺激を与えたブルース・マイケルソンの場合は、その第4章のハドリバーグ論の中で、メセント以上に積極的に公会堂のカーニバル化現象の具象化を評価する(Michelson, *Mark Twain on the Loose*)。民衆は町の特権階級に「復讐」(181)するだけでなく、「自分たち自身を解き放つ“freeing themselves”」(181)のであると指摘する。すなわち町の支配層がもたらす“威圧感”や、むかつくような“優越感”、もったいぶった“道徳意識”等々から自分たち自身を解き放ち、社会的政治的なヒエラルキーを窓の外へと放り出すのである、と。その「公会堂におけるユーモアと仲間意識“the good humor and fellowship of ‘the house’”」(181)は、たとえそれが一時のことであれ、お互いにばらばらの状態を取り除き、自分の中の閉そく状態を取り去るのだ。バフチンの言葉で換言すれば、「それ[祝祭]は、一時的なユートピア世界への旅である」(241)これが「この物語の弾むような肯定面である“[o]ne buoyant affirmation in this tale”」(181)。物語結末でそれが萎んでしまうと評するマイケルソンではあるが、この「弾むような肯定面」に対する彼の主張は揺るがない。マイケルソンが指摘する「弾むような肯定面」こそ、バフチンが論じる「カーニバル的なパトス」(240)であり、これぞ「交替と改新」(240)のパトスということになるだろう。

さらにバフチンは言う。こうした「カーニバルの影響は　この言葉を最も広く解釈しているのだが　文学発展史のあらゆる時代にわたって巨大なものがある。しかしこの影響は多くの場合、隠され、そのままの形で現れず、捕捉しにくい」(238-39)と。なぜなら、「中世の公的な文化は、その全形式、イメージ、抽象的思考体系のすべてを援用して、これ[カーニバル的なパトス]と真正面から対立する信念(つまり、現存する世界秩序、いまある真実の不変性、に対する信念)を吹き込んだのであった。このような信念の鼓吹は、ルネッサンス期にもまだ強力であって、個人的な思索探求や古典の典拠の書齋的研究(<カーニバル的意識>の光に照らされていない研究)によってはとても打ち負かすことはできなかった。真の支柱を与えることができたのは、民衆文化だけだった」(240)からである。人びとの意識を包み込む中世の公的文化の巨大な支配力下で戦うのは一筋縄ではいかなかったのである。その一筋縄ではいかないさまは、アメリカ史にあっての19世紀末の連邦政府や州政府の巨大な反動的支配力がトウェインの描く「ハドリバーグ」の結末描写に反映されているかもしれない。それゆえに、一見すると、この結末もまた「回避(イヴェイジョン)の結末」に見えるかもしれないのである。

だが、マイケルソンの言うように、トウェインの“The Man That Corrupted Hadleyburg”は、そうやすやすと「読解の単純さを許さない」(179)と言えるだろう。ハドリバーグの民衆意識のカーニバル化の影響の可能性は、「捕捉しにくい」かもしれないが、町の皮なめし屋のつぎの発

言、すなわち「不正直なその奴[町の特権階級の1人]はほら吹きとしてこの町の名譽を穢したのだから、これからはこの町には住み難くなるだろう」(46)という発言が猛烈な喝采を浴びる描写にも孕まれているのではないか。この作品は、そうした「カーニバルの影響」の可能性をも孕む作品になっている、と私は読む。

本作の解釈ならびに評価に基本的差異が生じる問題は、直接的には萎んでしまうように見える結末の解釈如何に依るのであるが、じつはバフチンが展開する民衆的・祝祭的なカーニバル形式の真の理解とも不可分の関係にあると思われる。そしてもちろん、トウェイン理解そのものとも不可分の関係にある。

バフチンがルネサンスの大文学と呼ぶシェイクスピアやセルバンテスの作品中に浸みわたる「カーニバル的雰囲気、民衆的・祝祭的広場の自由気ままな風」(240)は、ラプレーほど一目瞭然とまではいかないものの、やはりはっきりとトウェインの公会堂の場面にも吹いているのではないかと私は思う。それは「民衆の祝祭の陽気な気分の本質そのものを具象化した」(241)描写であると言ってよかろう。「もしも私が15世紀に生きていたら、私はラプレーになっていただろう」と、1903年にトウェインが述べたと先刻引用したが、彼はラプレーの著作(フランス語からの翻訳、イラスト合注版、ロンドンのJohn Camden Hotten社、640頁、1872年版)を所蔵していた(Allan Gribben, *Mark Twain's Literary Resources*, Vol. 2 [NewSouth Books, 2022] 590)。彼がラプレーを読んでいたのは、まずは間違いなからう。

(3) トウェインのユーモアはアメリカの南西部ユーモアと北東部ユーモアの両方の要素から成る。

David E. E. Slone, *Mark Twain as a Literary Comedian* (Louisiana State UP, 1979)では、トウェインのユーモアの背景を南西部ユーモアに偏重する伝統的な見方に警告を発するとともに、むしろ彼が文学的コメディアンとして北東部ユーモアの伝統から学んだ点を重視する。なぜなら、そこにこそ彼のユーモアの倫理的社会的基盤があり、彼の平等主義の源泉があるとスローンは考えるからである。「文学的コメディアンとしてのトウェインは、こうしたユーモアの伝統のそれぞれからの要素を発展させ、彼自身の声の中に取り込んだ」(12)のであり、それを作家としても成長させてきたのである、と。

一方、アメリカのユーモアをアメリカ人の「国民性に密接に結合させて」論じる Constance Rourke, *American Humor: A Study of the National Character* (1931; Harcourt, Inc., 1958年、原島善衛訳、『アメリカ文学とユーモア』北星堂、1961年、1970年)の観点は、「東部・西部のユーモアの共通点はヨーロッパの伝統に対抗する土着民文化の意識の高揚である」(原島善衛 347)とする。そもそもの文化形成のハイブリッド性を当然の前提とするコンスタンス・ルアークであることは言うまでもない。そのうえで、アメリカのユーモアをあくまでもアメリカの土壌で生まれ育ったと見る。(したがって、東部のユーモア、つまりヤンキーのユーモアの源もピルグリムをその母胎とする観点に立つ。ユーモア誕生における議論の弁証法的展開はじつにスリリングでさえある [pp. 19-21])。ルアークと対比すれば、上記スローンの論じるアメリカ北東部ユーモアの伝統や文学的コメディアンのユーモアは、アメリカの土着性よりもずっとイギリスのルーツが強調されるようである。

(4) 「ホイットティア誕生祝賀スピーチ事件」(1877年)を振り返る70歳のトウェインの批評精神とユーモアの健在ぶり」を読み取った。

テキストに無削除新版『マーク・トウェイン自伝』全3巻、没後100年刊を選び、「ホイットティア70歳誕生祝賀スピーチ事件」を見直す70歳のトウェインを論じた。「単なるユーモア作家にすぎないなら、生き延びることはできない」と述べる著者が、おのれの作家人生を振り返る批評精神、およびそこでのユーモアの健在ぶりを読み取った。以上。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 井川 真砂	4. 巻 No. 210
2. 論文標題 新刊紹介「巽孝之監修 下河辺美知子・越智博美・後藤和彦・原田範行編著『脱領域・脱構築・脱半球 二世紀人文学のために』（小島遊書房、2021年）」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 アメリカ学会会報 The American Studies Newsletter	6. 最初と最後の頁 8-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井川 真砂	4. 巻 22号
2. 論文標題 書評「Allan Gribben, Mark Twain's Literary Resources: A Reconstruction of His Library and Reading. Vol. 2 (NewSouth Books, 2022)」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 マーク・トウェイン研究と批評	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井川 真砂	4. 巻 -
2. 論文標題 ホイットィア70歳誕生祝賀スピーチ事件をどう見るか 『マーク・トウェイン自伝』における著者晩年 の批評精神	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 人文研紀要、中央大学人文科学研究所	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井川 真砂	4. 巻 第20号
2. 論文標題 <書評> マーク・トウェイン著、里内克巳訳 『【連載版】マーク・トウェイン自伝』（彩流社、2020年）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 マーク・トウェイン研究と批評	6. 最初と最後の頁 68 - 71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井川真砂	4. 巻 第53巻 1号、総号125号
2. 論文標題 <Introducing World Literature>ジョン・キーン作「リヴァーズ」 『ハックルベリー・フィンの冒険』の続編	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 New Perspective (新英米文学研究)	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井川 真砂	4. 巻 第51巻、1号・2号
2. 論文標題 文献紹介「アメリカ合衆国の人種をめぐる歴史理論書 ホワイトネス・スタディーズに着手する David R. Roediger, 『The Wages of Whiteness: Race and the Making of the American Working Class』 (1991; Revised ed., Verso, 1999).	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『New Perspective』 (新英米文学研究)	6. 最初と最後の頁 87 - 89
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 井川真砂
2. 発表標題 マーク・トウェイン『我が自伝からの抜粋』最終章を推理する 祝賀会スピーチ事件 (28年前) と人担ぎエピソード (40年前) との抱き合わせ
3. 学会等名 日本マーク・トウェイン協会第28回全国大会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------